

創刊 60 周年記念特集にあたって

佐藤光源*

本誌「精神医学」は「臨床に即した高度な内容をわかりやすく提供する」ことを編集方針として 1959 年に誕生した。終戦から 14 年が経過して日本の精神医学がようやく復活の兆しを見せ始めた当時は、精神医学領域の定期刊行物は日本精神神経学会の「精神神経学雑誌」(精神経誌)が唯一のものであったが、内村祐之は「遺憾なことに学位論文風のものが多くて臨床医家に必要な知識の啓発や総説が非常に少なかった」と振り返っている。そうした中で、精神経誌のほかにもう一つ精神科臨床に直接役立つような定期刊行物を持ちたいという有志が集まって編集同人になり、本誌が創刊された。本誌の英文表記が「Clinical Psychiatry」である所以でもある。この臨床重視の編集方針を貫いて 60 周年を迎えたことは、祝福に堪えない。

私事ながら、本誌が発刊された 4 年後に精神科医になった筆者は、症例を中心にした臨床研究は本誌の「症例報告」や「研究と報告」、「総説」の各欄に投稿し、学位論文や動物実験による前臨床研究は精神経誌に投稿してきた。臨床に始まり臨床に終わる精神医学を目指した多くの研究者にとって、本誌は貴重な数少ない発表の場であった。

創刊 40 周年の記念特集を開くと「日本の精神医学・医療の 40 年」を回顧した秋元波留夫と大熊輝雄の鼎談があり、つぎのような話で始まっている。「欧米の精神医学が病院精神医学から大学での精神医学研究へと発展したのに比べ、日本は欧米で出来上がった大学精神医学を明治初年にもってきて、それがその後の大学精神医学と地域の病院精神医学のアンバランスを生んだ」とか、戦前は効果的な治療法がきわめて乏しく、宿命的な予後悲観論が排除政策に繋がり、長期にわたる隔離収容や私宅監置が行われたことや、精神病院における治療や地域精神衛生活動などが研究論文の対象になることはなかったことなどが回想されている。

それが大きく変わったのは薬物療法が軌道に乗った 1950 年代後半のことで、精神病性障害の症状寛解を目指した薬物療法が軌道に乗り、1960 年代には作業療法など

* 恵風会高岡病院(☎ 670-0061 兵庫県姫路市西今宿 5-3-8)

自立に向けた取り組みが始まった。本誌が創刊された1958年はまさにそうした現代精神医学の幕明けのころであった。その後、1990年代には非定型抗精神病薬が普及し、多くの患者が錐体外路性副作用から解放されて心理社会的介入が可能になったことで精神障害の多次元概念が広がり、臨床病期ごとに薬物療法と心理社会療法をバランスよく組み合わせた治療法が推奨されるようになった。その一方で、アメリカ連邦議会は1990年代を「脳の時代」と定めて脳科学研究を強力に推進し、日本でも精神現象の舞台装置である脳の分子生物学的研究や神経画像解析法の進歩を取り入れた病因・病態研究が本格化している。

そして、21世紀の精神医学が日本精神神経学会総会のメインテーマ「心の世紀における精神医学・医療と福祉」(2000)で幕を開け、“Stop exclusion-dare to care”を謳ったWHOの「World Health Report 2001」が発表され、2002年にはアジアで初めて第12回世界精神医学会大会が横浜で開催された。この頃から、日本の精神医療は症状寛解からリカバリーに向けた、人中心のケア(person centered care)へと大きな展開をみせ、その後も精神科臨床にかかわるような出来事が相次いだ。たとえば、専門医制度の発足や医療観察法の施行、精神保健医療福祉の改革ビジョンの実践、精神疾患の病因・病態研究の進歩、さらに相次ぐ大規模自然災害で災害精神医学がクローズアップされたことなど、枚挙にいとまがないほどである。

本特集では、その中から精神科臨床に影響を及ぼした主要なテーマを選んで、何を学び何が改善されたのか、その分野に造詣の深い方々が回顧と展望を行っている。そこに示された進歩と新たな課題は、精神科臨床のさらなる飛躍を約束するものであり、今後の精神医学がどのような発展を遂げているのか楽しみであり、大いに期待している。